

バーラーマーサー (Bārahmāsā) から見たインド文学

12 か月の風物を歌いながら、それに孤閨の思いを重ね合わせたバーラーマーサーと呼ばれる詩の形が、北インドのグジャラートからベンガルにかけての広い地域に見出される (Vaudeville, 1986:3)。

インド文学史を考察する一つの糸口として、バーラーマーサーを取り上げる理由はいくつか考えられる。

- ① 自然と人事は、多く言語の文学の場合と同じように、インド諸言語の文学においても 2 つの大きなテーマである。この二つのテーマが文学的営為の全体に対して占める位置が、インドと日本では類似するところが大きいのではなかろうか。たとえば、タゴールの歌曲集成『ギトビタン Gitabitān』は、次のように編成されている。

| | | |
|----|------------------------|-------------|
| 1. | 宗教歌 (Pūjā) | 238 頁 (39%) |
| 2. | 愛国歌 (Swadesh) | 25 頁 (4%) |
| 3. | 恋愛歌 (Prem) | 153 頁 (25%) |
| 4. | 叙景歌 (Prakṛti) | 114 頁 (19%) |
| 5. | 雑歌 (Bicitra) | 62 頁 (10%) |
| 6. | 催し物に際しての歌 (Anushtanik) | 5 頁 (1%) |

(頁数のあとの括弧は『ギトビタン』総頁数 614 頁に占めるパーセンテージを示している。少数以下第 1 位を四捨五入したため、合計は 100%にはならない)

すなわち、『ギトビタン』の構成は宗教歌と恋愛歌と叙景歌を三本柱としている。一方、『古今和歌集』は全 20 巻中、6 巻が季節の歌、恋歌が 5 巻を占める。『古今集』の雑歌 4 巻神祇歌、釈教歌、各 1 巻を、『ギトビタン』の宗教歌と雑歌を加えたものと対応させると、『ギトビタン』は宗教歌が多いのが特色である。ここから、ただちに宗教的なのがインドの特色だという常識に沿った判断をくだすのはひかえておきたい。恋愛歌と叙景歌 (なかには 6 つの季節にしたがって分類されているから季節の歌といって差し支えない) がともにかなりのウェートを占めることを確認しておこう。

バーラーマーサーの問題は、叙景歌 (= 季節の歌) が恋愛歌と重ね合わされていることである。これは和歌の場合にも見られる現象だが、バーラーマーサーのように一つのジャンルを形成したのには、どういう事情が働いていたのであろうか？

→自然現象と恋愛 (文化) が、どのように相互規定的に働くか。

気候→風土 (北インドの気候・風土の大きな地方的差異と暦 (次の②を参照)

にもかかわらず、バーラーマーサーを成り立たせる共通の文化 (③参照)

② バーラーマーサーと暦

暦編成が言語によって異なるらしい。

◆言語によって、どの月とどの月がある季節に包摂されるかが異なるらしい。

たとえば、ベンガル語でファルグン月とチョイットロ月が春（ボシヨント）だが、パンジャービー語ではチェート月とヴァサーク月が春（バサント）である。また、ベンガル暦では、1年は夏（グリッショ）の最初の月ボイシャクから始まるが、パンジャービー語では春の最初の月チェートから始まる。

◆6つの季節への月の配当を各言語ごとに表にまとめてはどうか（岡口典雄「パンジャービー文学史におけるバーラハマーハー」『南アジア言語文化』第6号、2012年、P.21の表を参照）。

◆各月ごとに、各言語のある作品（なるべく代表的なものが望ましい）に列挙される自然現象（天候、草木花、動物など）を表にまとめてはどうか。

◆各月ごとに、上記作品で女性の恋がどう描かれているかをまとめて表にしてはどうか？

この作業によって、各言語間の関係が示せる可能性。

③ バーラーマーサーを生み出した共通の文化（文学伝統）

◆古典サンスクリット文学の伝統、カーリダーサの『雲の使い』との関係

季節ごとの配当と月ごとの配当のちがいはなにか？

『雲の使い』は、caumāsā のほうにかかわるか？

Caumāsā は、アーシャール月あるいはシュラーヴァン月に始まり、雨季の4カ月に舞台にする。雨季は人が家に閉じ込められる季節（雨安居）。その季節に帰らぬ人に対する慕情（ヴィラハ）

◆北インド一帯に分布するフォーク・ソング。（各言語について、フォーク・ソングとバーラーマーサーの関係を探る。そこから、ほんとうに「共通のフォーク・ソング」が想定できるかどうか、展望することができよう。あるいは「共通のフォーク・ソング」が、風土的、文化的な相違によって、どのように変化していくかについても手がかりが得られるかもしれない）。

◆サンスクリット文学の季節と恋情を重ねる詩も、当時のフォーク・ソングに依拠していたのかもしれない。その場合には、当時のフォーク・ソングとバーラーマーサーが依拠したフォーク・ソングの関係を問題にしなければならない。その際には、プラークリットのバーラーマーサーについての情報が必要になる。

④ バーラーマーサーはいかなる集団と関係があるのか？

◆12か月の気候の変化を迫りかけることは、農事暦と密接な関係があるという推論がある。Zbavitel が The Farmer's Baromasi と呼ぶものである。そして、このタイプ

は、アッサム、ベンガル、オリッサで、「コナの格言 (Khanār Bacan)」とか「ダークの格言 (Daker Bacan)」とか呼ばれる農事諺と関連して考えられている (Zbavitel, 1962:166-7)。当然ながら農民集団と関係づけられる。つまり、定着集団と関連づけているわけである。

この考え方は、12か月の風物にたいする関係を説明することはできるが、恋愛詩との関係については説明しにくい。

◆もう一つは、バーラーマーサーを移動集団と関係づける考え方である。バーラーマーサーは風物詩と恋愛詩の結合であるが、恋愛詩といっても、それは孤閨を嘆く女性の心持を述べたもので、インドでは *viraha* と呼ばれるジャンルの恋愛詩である。ヴィラハは不在の夫ないし恋人を想う詩であるから、長期の移動とは無縁な定着集団とは、どちらかといえば結びつきにくいように思われる。1375年にムスリム詩人 *Multā Dāūd* によってアワディーで書かれた最初のマスナヴィー詩形の作品 *Candāyan* に見出される *Maina* のバーラーマーサーは、*Lort/Lorik* というアヒール (牧畜カースト) の英雄を主人公にした *Bhojpuri* の民間叙事詩 (folk epic) のスーフィー版と言われている。また、ベンガルのピロホ (ヴィラハ) 詩はクリシュナの不在を嘆くラーダーをヒロインとしており、まさにゴープ・カーストの生活を背景としている。ベンガルのヴァイシュナヴァ派の有力な支持集団が、商人カーストであったことも周知の事実である。総じて、商人、牧人、芸人、戦士といった移動集団が、バーラーマーサー作成の背後にあると考えられている。

また、時代の推移とともに、巡礼の慣行が広まると、定住民にも移動の機会が生じるようになったことも考えなければならない。

◆定着集団か移動集団かは、かならずしも相互排他的ではなく、両集団とも関わったと考えることも可能である。広く事例に当たって、検討することが必要であろう。

- ⑤ フォーク・ソング風バーラーマーサーから宗教的・文学的バーラーマーサーへ
バーラーマーサーを民衆的なものから、宗教的・文学的なものへと昇華させる契機は、*viraha* というテーマであったにちがいない。ヴィラハは不在の存在を望むことであって、恋愛の我を忘れて相手へと心が走るモメントは人間の感情のなかでも強烈なものであり、それは特に相手が自分の領分には不在であることによって最高潮に達する、この強い思いは容易に目に見えない神への愛の象徴となりうる。ヴァイシュナヴァ神学では、ラーガーヌガ・バクティという形で、恋愛が信仰に転化し融合したのである。そこで恋愛詩は宗教詩と一致し、詩学が神学のモデルとなった。大きく見れば、バーラーマーサーは、こうした流れの一部をなしていたのである。

恋愛詩は自分という限界を突破できないのが通常であるが、もし自分から相手へと
いうモメントが極限的に働いて、自分という引力圏からの脱出に成功した場合には、*viraha* は *vairāgya* に転化し、恋愛詩であるバーラーマーサーから宗教詩としてのバ

ーラーマーサーが生じる、とは考えられないか。

⑥ バーラーマーサーの系譜

ズバヴィテルは月次祭や農耕に関わりあるバーラーマーサーが本源的であり、ヴィラハ・バーラーマーサーは派生的だと考える。その根拠は、ヴィラハのバーラーマーサーのなかに、ヒロインの想いと縁も所縁もない自然描写が存在することがあるからだという。先行する自然描写に、うまくヒロインの心持を連結することができないために齟齬が生じたと考えるからである。しかし、同時代に系統を異にする、定住集団の風物詩と、移動集団のヴィラハ詩が結びつき、その時の手際が悪くて齟齬が生じたのだとは解釈できないであろうか。かならずしも、ズバヴィテル説に束縛されることなく、さまざまな解釈を出してみることで、面白い切り口が得られる可能性がある。

⑦ そのほか考察に際して留意すべき点

◆bārahmāsā とそれより月の数が少ない caumāsā, chaymāsā, aṣṭamāsā との関係。とくに、viraha と『雲の使い』との関わりが問題となる caumāsā との関係。

◆南インドにおける季節と恋愛が接合する詩を、バーラーマーサーに比べてみる必要性。

◆ペルシア語、アラビア語における同種の詩の存在？あるいは、ウルドゥー語を介した、それらの言語の文学へのなんらかの影響？それとは直接関係しなくても、ムスリム詩人のバーラーマーサーは検討する必要があるようだ。面白そうなテーマ。

◆この集会で、この項目を増やすこと。

成果のまとめ方。

* 各言語ごとに、代表例を訳出しながらの議論。岡口さんの論文を参考に。

グジャラティー、ラージャスタニー、ヒンディー、ウルドゥー、ベンガリー、オリヤー、オホミヤ
サンスクリット、プラークリット、タミルなど

*最後に、日本文学研究家(和歌史専攻の方がいい)、インドの暦に詳しい方を交えて座談会を持ち、総括とする。

参考文献

Dasan Zbavitel, "The Development of the Baromasi in the Bengali Literature", *Folklore*, April-May 1962.

Charlotte Vaudeville, *Bārahmāsā in Indian Literatures*, Delhi, 1986.

岡口典雄「パンジャービー文学史におけるバーラハ・マーハー」『南アジア言語文化』第6号、2012、pp.20-32.

ベンガル研究会(共訳)『コナの格言:ベンガルの農事諺』『コトラニ』第9号、1984、pp.38-62

